

ヘルパーの援助によつて家族員の全てが安定した生活を維持し、家族が健全な労働力の再生産の場として機能を始めて果しうるのではなからうか。今後これら勤労者世帯の比重の増大と共に、その福祉は広く国民生活の中核として意義を持つものであらう。

## 社会福祉協議会における現状と

### その問題点

林 法 道

今日、我々日本人の生活を考察してみるに人々の生活にしろ、マスコミの内容にしろ、その中に比較的多くの利己主義的な、あるいは又、無責任的ムードが潜んでいる事に気がつくであらう。国民の福祉の増進をたゞ一向に念じ社会事業を推進しつゞけている人々がいる反面、このようなムードが社会の中に存在することは、これを近代資本主義社会の遺産や島国根性としてかたづけしてしまうことは大変な誤りである。それを最も明確に表わし

ているのが日本に於る保険制度が発達しにくいという一例である。これは日本人全体が貧乏な爲に、とても他人の貧乏までは手がとぐかないとゆう見方もあるが貧乏国は貧乏国なりに手をつなぎあつてお互の救済を図る方向に進むのが当然であらう。このような社会の状態の中に於ては、社会保障や社会事業の目的達成の爲のカギをにぎるものは市民性ではなからうか。「人間は社会的動物である」とはアリストテレスの言葉であるが、人間はまつたく一人ぼつちで他の人々と全然交渉を持たずに生活することはできない。家族、近隣、職場、市町村、国家と多かれ少なかれなんらかの集団に属し、その一員となつて生活している。そしてこのような原理を理解した時始めて市民性にめざめるのである。社会事業の実践に於ても多くの方法があるが、結局その活動の成功、不成功を決定するものは、それに参加した人々の市民意識の強弱の度合によつて決まるといつても過言ではあるまい。しかるに、その方法の中でも特にその度合によつて左右されやすいのがコミュニティオーガニゼーションである。これは又一方、他の方法の基盤を造る役割をも有し

ているといえる。この方法は、一般市民の問題意識をさぐり、市民性をかりたて、問題に対して市民が丸となつて行動をするような方向に導く事を目的とするが、その組織化の方法に於ても、上からの働きかけにより集団内の同種のニードが結合へと発展するものと下から自然發生的に表面に押し出て来た結果、ニードの解決には個人の力よりも集団の力によることが能率的であり、効果的であるとのおのづから会得していくとゆう二方法がある。

この方法の内では、もちろん後者の自然發生的方法が理想的ではあるが、今日の日本に於てはその可能性は比較的少ないといつてよからう。なぜならば問題意識は十分であつてもそれを軌道の上に運ぶ市民意識が不足しているからである。このような社会福祉の増進に対しての基礎的な問題点の解決をはかりうるものとしてコミュニティ・イオーガニゼーションがあり、その実践機関として社会福祉協議会が存在するのである。そのような重要な位置にある社会福祉協議会の現在の姿はどうであらうか。法で定められた都道府県の社会福祉協議会でさえ、その建物は見るに忍びない陰気なところや、独立の事務所さえ

有していないところもあり、その中で働く人々は全く専門知識をもちあわせていない人々が多いようである。まして法で定められていない市町村の社会福祉協議会などは、その事務所もほとんどが役場や福祉事務所に依存している状態である。この一件でも如何に住民の社会福祉協議会への認識度が低いかどうかと共、日本人全体の福祉の増進への熱意をも知ることができるのである。それでは我国に於ける地域組織化の可能性はあるのか。社会福祉協議会が成立してから今日までには十年以上もたつてはいけるけれども、我國の社会の特殊性の為に社会福祉協議会はその十年という年月を独自の組織の確立についやしたのである。しかし社会福祉協議会成立後から今日までの社会福祉協議会組織の編成期は、日本の社会の特殊性という一面から考えると必ずしも無意味なものではなかつたように思われる。自主的な活動に対して消極的である我国の人々をリードしていくには強力な組織をつくるのが先決問題であつたのである。又その成立なくしては我国社協は本来の活動が展開されえないのではなからうか。さて、そのような組織

の形成期を経ていよいよ今日の社会福祉協議会は本来の活動にのりだすべき時期がきているのである。現在の我國の町村部に於る種々の社会現象は社会福祉協議会が本来の活動を開始するに最も適当な時期であることを示しているのではないだろうか。これらの社会現象を適確にとらえ、それに合つた活動を展開すれば地域の組織化も十分可能なものとなつてくるであらう。

## 特殊学級に通つてゐる児童の

### 余暇指導への一考察

西川 哲

精神薄弱者が問題になるのは、普通の人間を主とする

社会に生存するからだということになるが、人間という最も高度に発達した生物では、そのひとりひとりに能力の差があり、あらゆる時期に故障をおこす可能性があるので、精神薄弱者がいるということは例外のことではな

く、本来、人間の社会は、精神薄弱者がいる社会だといふことが前提とされねばならない。このような現実をどう認め、どう受けいれるかということが、それぞれの社会のありかたをめぐるものになる。

そこで、社会や親のその子に対する正しき理解のもとで、その指導のよろしきを得れば天与の能力を充分に伸ばし得ることは、よく知られている処である。しかし、そのためには、こどもをよく理解し、その資源と能力に応じた適切な指導がなされねばならない。

一般に特殊学級の指導は、生活指導に重点がおかれ、遊びや作業、技能、感覚の訓練を通じ、まず仲間との協力や、きめられたルールを守ることなどを繰返して指導しているが、その子供たちの社会性の低さは、家庭では「もてあまし者」になり、地域の同輩、仲間たち、からも相手にされず孤立している。

「遊び相手がない」「遊び方を知らない」ことからとすれば放任され、いろいろの好ましくない事例の発生がまま見られる。だんだん年令が進むにつれて、街頭放浪、浪費、映画館での不純行為など、教師、父兄の肝を